

うるくの歴史と文化を語る会
会報ガジャンピラ
 第 13 号

発行：うるくの歴史と文化を語る会
 発行人：當間一郎 編集人：赤嶺和雄
 〒 901-0153
 那覇市田原 4-1-1 JA おきなわ小禄支店内
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486



當間 一郎
 (うるくの歴史と文化を語る会会長)

「垣花ま〜い」

平成24年度の『うるくま〜い』の一環として、昨年11月25日(日)の午後2時から、「垣花」地域を会員でまわり、多くの事を学んだ。ユイレールの奥武山駅下の広場に集合し出発した。

その日の講師は、那覇市歴史博物館学芸員の外間政明氏で、垣花の名所旧蹟のくわしい解説をして下さった。

垣花は、1672年に小禄間切垣花村となったが、それ以前は真和志間切儀間・湖城村であった。1903年に那覇区に編入。1913年に垣花町となる。木綿織り、パナマ帽子編みのさかんな所であった。王国時代は儀間真常家の旧領地であった。

約3時間の行程でまわった名所旧蹟は、①ガーナムイ・ナハキハギ。②山下町第一洞穴遺跡。③ウティンダ樋川。④住吉神社。⑤奥武山世持神社等を歩いて、小禄間切時代の特徴を学んだ。

会員の参加は、例年より少なかったが、徒歩で歴史の道をふみしめての「垣花ま〜い」は、意義深いものがあった。この垣花地域に屋良座森城があったが、去る沖縄戦で海中に消えた。この城は、琉球王国時代、那覇港入口の南側の砲台として重要な機能を有していた。大砲を配備し、外敵を防ぐ役目であった。

ガーナムイは、那覇市鏡原町にある。戦前は海中にあったが、戦後に埋めたてられた。ユイレールの通る「能登の海」の後方にある。この森には、ナハキハギの群落がある。ナハキハギは、アフリカ、オーストラリア、インド、東南アジア、大太平洋諸島、中国大陸、台湾などに分布するマメ科の植物である。本県は西表島、石垣島、沖縄島の海岸に生息し、沖縄がこの植物の北限になっている。

一方、ガーナムイは「鶴森」と書き、名勝地として知られていた。1719年に来島した冊封副使の徐葆光は、鶴頭山(ガーナムイ)と名づけ、1800年に来島した李鼎元も景勝地として詩でたたえている。

山下町第一洞穴遺跡は、奥武山公園の南西側、山下町一丁目の住宅地域の丘にある、旧石器時代(約3万3千年前)の洞穴遺跡で、重要な文化財である。

ウティンダヒージャー(落平樋川)は、那覇市山下町、奥武山球場近くにあるが、現在は清水の量が激減している。戦前は飲料水として旧那覇市街地で売られ、飲まれていた。

柳田国男の『海南小記』(大正14年)の「南の島の清水」や、島袋全幸の『昔の那覇と私』(昭和61年)の「落平(ウティンダ)」に、当時の様子が詩情豊かに記されている。



ウティンダヒージャー(落平樋川)、垣花ま〜い参加者の皆さん



山下町第一洞穴遺跡の説明をする外間政明氏(右から2人目)



住吉神社参道、上に移設された湖城、儀間ノ火神がある



平良 徹也

(県立芸大附属研究所 共同研究員)

真珠道の向こう側へ

— 小禄の歴史と文化を考えるための那覇江・真珠道文化圏論 (仮説) —

・小禄の歴史と文化を考える時、真珠道は歴史上の単なる郷愁の小路と云うものではなくて来る。例えばそれが琉球王国時代の那覇港防衛の為の軍事上の要路であったとしても、である。歴史のダイナミクスは、それ以上にかげがえのない様々な文化をその道筋の村々(現在の字)^{あざ}に残して来た^{あざ}と、やはり考えてしまうのである。

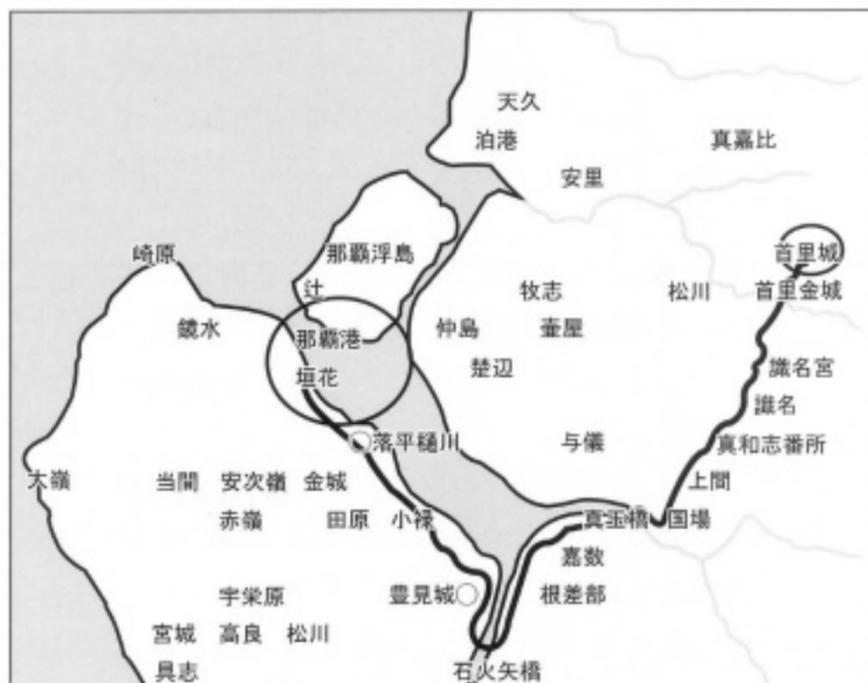
真珠道は、明への入貢(1372年)以後アジア貿易の拠点としての地位を確立し急速に発展して来た那覇港(那覇浮島)を倭寇や外敵の侵入から防衛する為と国都首里と南部路の人々の往来の利便に供すると云う二つの目的の為に、1522年敷設された琉球王府の公道(図1)であった。首里城を起点に、現在の金城町石畳道、金城橋、識名平坂、識名、真和志番所、上間、国場、真玉橋、真玉橋(字)、嘉数、根差部、石火矢橋、豊見城グスク、豊見城、小禄、垣花、那覇港南岸に到る長さ約10Kmに及ぶ石畳道であった。那覇港の大事に際しては、首里からの軍勢と島尻各間切からの援軍はこの要路を^{あざ}通って集結し、豊見城グスクや根立樋川(落平樋川)の格護【用例は「真珠湊碑文」：しっかりと守り切る^{あざ}こと】や那覇港防衛の任を果たすことになっていたものである。

資料1 那覇市の航空写真：現在



Google より引用

図1 真珠道ルート参考図：明治初期



Google 写真上に那覇古地図情報を上乗せ：筆者

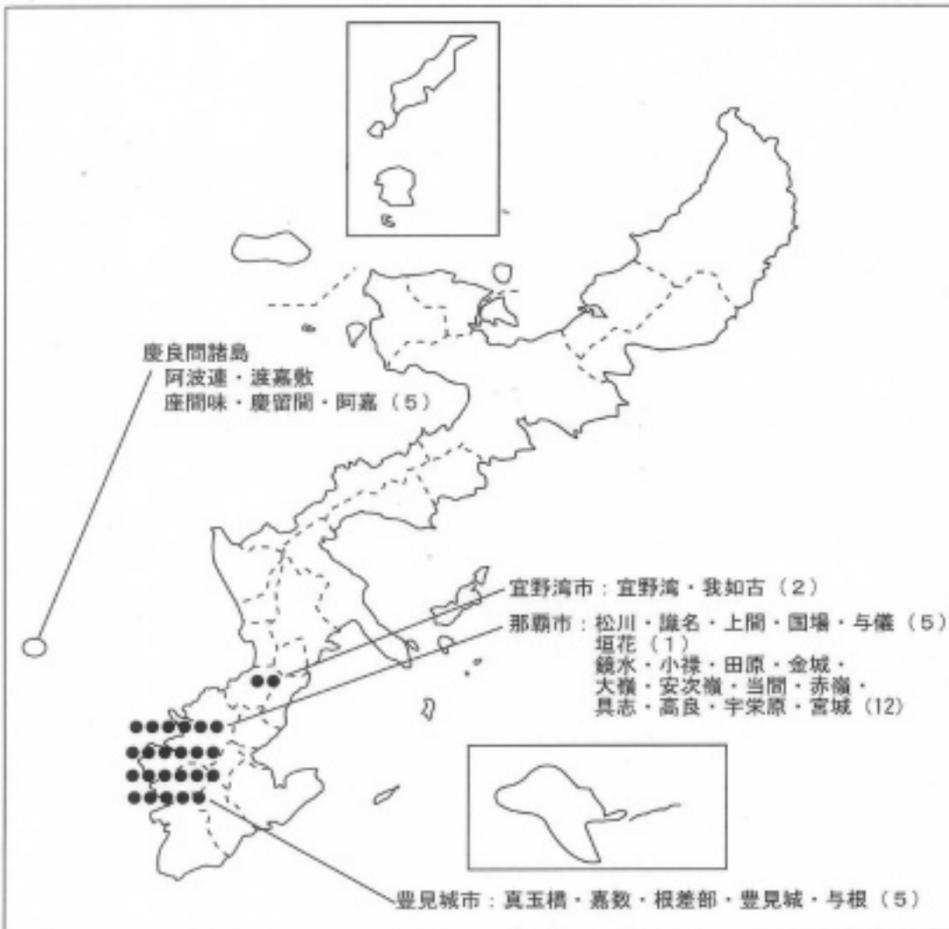
しかし今回ここで述べようと思っていることは直接的には上記のような事なのではなく、この真珠道や那覇港(那覇江)があることによって、小禄地域を含むその周辺の村々にどのような文化が伝わる(あるいは残る)ことになったのかの一端を、ある行事を通して検証してみよう^{あざ}と云うことになるものである。その行事とは、ムラの女性たちのみによって現在まで伝えられ、旧暦3月3日、3月4日に行われる三月遊び(サングッチーまたはサングッチャー)のことである。

【注 但し、三月遊びがいったい何時頃から行われるようになったのか、現在、よく分かってはいない。那覇市上間では、三山対立時代には行われていたとの伝承があり、それにちなむ芸能「ハイファー棒(祓えの為の芸能で、三月遊びが起源)」と共に『上間字誌』に詳しく紹介されている】

三月遊びは現在、小禄地区の旧字のほとんどで開催期日に多少の相違はあるものの、毎年の年中行事としてごく当たり前に取り組まれている。その為に、北部や中部、南部の各ムラでも同様に行われているだろうと思われる向きもきつと多いに違いない。だが実際には、小禄地域を含むここで云う真珠道沿いの各字や那覇港周辺、慶良間諸島や宜野湾の一部の字(ムラ)を除いては、ほとんどの地域ではもはや行われてはいないのである。

ここに一枚の地図Aを用意した。

地図 A 三月遊び分布図 (沖縄本島および周辺離島)



この地図 A は現在の沖縄本島および周辺離島の三月遊びの実施状況を白地図に●で分布図として示したものである。北部や中部、南部のほとんどが空白であることに対して、上述の真珠道近辺の地域には見分け難い程に●が表示されていることが分かるはずである。

小禄地区では、小禄・田原・金城・大嶺・赤嶺・当間・安次嶺・鏡水・宇栄原・高良・宮城・具志の12字。

那覇港近接地区では、垣花。

真和志地区では、松川・識名・上間・国場・与儀の5字。

豊見城市地区では、真玉橋・嘉数・根差部・豊見城・与根 (泊の製塩移住者が始めた) の5字。

ほかに慶良間諸島 (座間味・阿嘉・慶留間・渡嘉敷・阿波連) と宜野湾市の一部 (我如古・宜野湾) となっていて、おおよそ30字で実施されているのみなので

ある【注 但し、女性たちが主体となる字単位の行事としての饗宴を三月遊びと定義してのもの】。

慶良間諸島は那覇港と水運で密接に結びついていた事を考慮に入れると、この地図 A から、次のことが云えるようである。

三月遊びは

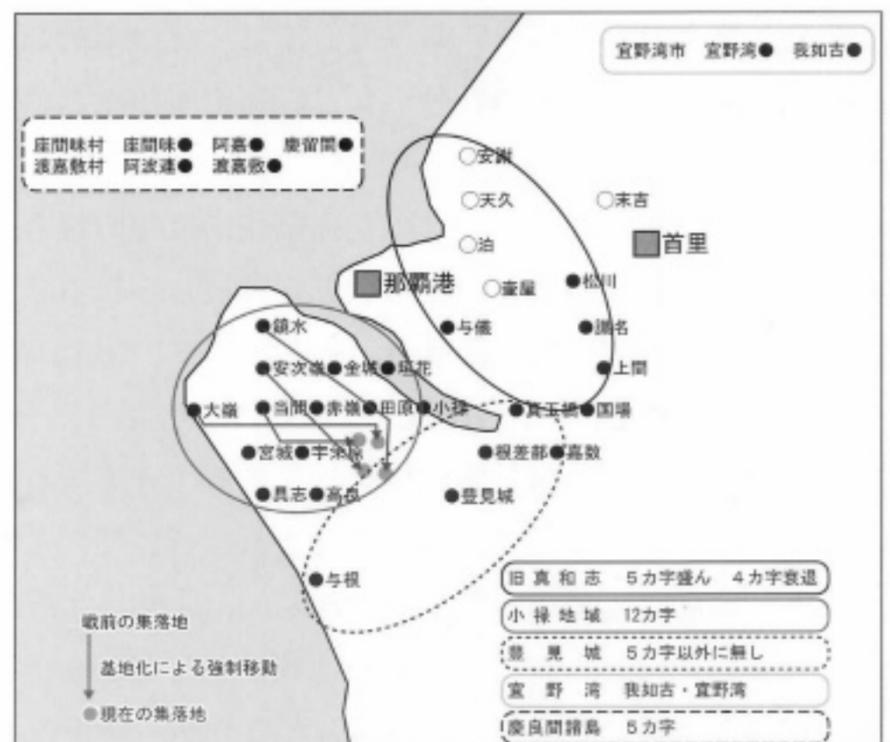
- (1) 真珠道沿いとその周辺で盛ん
- (2) 那覇港の周辺地域で盛ん

であると云うことになる。

この二点を考慮に入れて、右の地図 B をご覧頂きたい。

(1) には松川・識名・上間・国場・与儀 (真和志地区)、真玉橋・嘉数・根差部・豊見城 (豊見城地区)、小禄・田原・金城 (小禄地区) の各字が含まれ、(2) には垣花、鏡水、大嶺・赤嶺・当間・安次嶺・宇栄原・高良・宮城・具志 (小禄地区)、与根 (豊見城市地区) の各字が含まれている。小禄地域の12字と漫湖周辺豊見城の5字、真和志の東部地区5字【西部の泊・天久・安謝、中央部の壺屋・牧志では現在行われていない。】で盛んであると云うことになる。実はこの地域での三月遊びの持たれ方にはほぼ共通する内容があることが確認出来るもので、

地図 B 三月遊び実施地域 ●現在あり/盛ん ○不明または衰退



- ① 女の腰憩い (クシユックイ) として行われる
※ 旧暦 2 月 2 日には腰憩い (クシユックイ) :
土地公祭が行われる地域もある

- ② 当日午前中、供物の準備。午後、御願巡行。夕方、遊び本番。
- ③ 供物シムイが盛られる (但し、松川・識名・上間では今は作られていない)
- ④ 御嶽参詣や宗家巡行では、道ジュネーが鳴り物入りで賑やかに行われる
- ⑤ 御嶽や宗家では祈願に続いて、シムイの御願踊りや奉納芸能が行われる

- ⑥ シンムイの直会が行われる
- ⑦ 御座では御願の一行の坂迎え（サカンケー）が行われる
- ⑧ 饗宴（遊び）では、はやりの舞踊を中心に現在でも遅くまで踊られる
- ⑨ 三月遊び歌の掛け合いがかつては即興で見られたが、現在はほぼ型どおりのカチャーシー曲に固定化されている
- ⑩ 婦人会が主催。婦人会の行事としては年間で最大の行事である（写真 1）
※ 婦人会役員の承認が当日、行われる地域もある（役員交代儀礼の意味あり有）
- ⑪ 高齢者への報恩の宴としても実施される
- ⑫ 機織りの技能の競い合い・晴れ着勝負（チンスープ）も時には見られた

などが共通点として上げられる。ほかに

⑬ 「イニシリ節」や「作たる米」は欠かしてはならない奉納芸能で、役員有志で行われる上間や識名（写真 2）、国場などの事例は、宜野湾市我如古の「スンサーミー」（三月チャーの演目）や字宜野湾の三月遊び座開きのシンムイの御願踊り（シンムイを先頭に四つ竹を手にして隊列を組み、スンサーミーの歌節で遊びの御座を七周回：写真 3）にも通底するもので、田植え後の稲の成長期に当るこの時期の豊穰予祝の念が濃密に窺えるものである。そしてこのことによって、この三月遊びが単なる座興的な遊びなどでは無く、稲の生長サイクルにも合せたかつての神まつりの変化した姿の一つの表れ方であることが分かって来る。

写真 1



高良のかぎやで風

撮影：筆者

写真 2



識名の奉納芸能「イニシリ節」 撮影：筆者

写真 3



宜野湾のシンムイ御願踊り 提供：宜野湾区

また上間や識名、国場、壺屋などでは、かつては御嶽の御庭に仮設舞台を組んで、女性たちだけの本格的なムラ芝居（「泊阿嘉」「奥山の牡丹」など）も上演したとのことで、沖縄各地の八月豊年祭（村芝居）にも引けを取らぬ神遊びの内容をもつものでもあった。

つまり三月遊びは沖縄各地の女性祭祀、紙幅の都合で詳しくは述べられないが、折目や節替えの為の豊年踊りウシデークや海神祭（ウンガミ）などとは演じられる芸能と云う点では異なる様相を見せながらも、神まつりのあり方としてはほぼ同様な儀礼構造のもとにあることを示していると考えてよいものなのである。

沖縄には、神を招き、持て成し、ともに遊ばば、その願いが叶えられると云う祭祀観があり、加えて女性（オナリ）は男性（エケリ）に対し霊的に優位である（守護する）とするオナリ神信仰の宗教観がある。その祭祀観や宗教観が三月遊びの中にも表現されていると云うわけで、これまではその調査が不十分であったために座興的な側面（遊び）が強調されて来たのだらうと考えたと云うわけだ。

では実際にはどうだろう。この地域の三月遊びを中南部や北部で今も行われるウシデークやウンガミ（北部）などと同等と単純に説明して良いものだろうか。祭祀のあり方としての（神の招請、神との同道、神の祝福、神人交歓・神送り）には、確かに共通する展開構造が認められる。だが祭祀執行組織のあり方や、儀礼のあり方、その他にも異なりの中がかなり大きい。つまり単純に同様なものとは考えてはならないものの、その差異を相互に比較検討して行くことによって、沖縄の女性祭祀のあり方全般へと統合して考えることが可能になるものである。三月遊びを支える祭祀の論理の面からはかつての琉球王国のノロ制度の一端が見え、芸能のあり方（辻町や芝居興行、流れ船の影響など）や供物（食材：御三味や菓子など）のあり方、衣装のあり方（緋織や紬織など）などからは那覇町方

からの影響等が確かに見えるものである。

資料 2 の大嶺のシンムイの食材とその盛り方からその一例を示そう。

資料 2 那覇市字大嶺のシンムイの食材とその盛り方 (2007年)

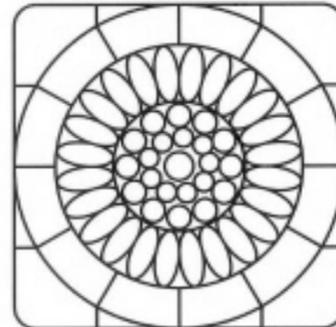
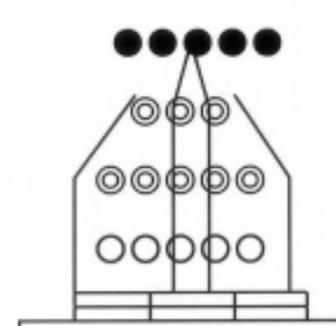
	<p>平面図</p>  <p>正面図</p> 	<p>辺 御膳 (器) 地/板大根 揚げ豆腐 天ぷら 紅梅卵</p> <p>心 大根 中央 黒木</p> <p>【盛り方 数字の順】</p> <p>天 ⑦黒木 ②大根心柱 ⑥紅梅卵 (四段) ⑤天ぷら (二段) ④揚げ豆腐 (二段)</p> <p>地 ①御膳 (器) ③板大根</p>
--	--	--

写真 4 シンムイの最終仕上げ

参考図 積み盛りの模式図

食材の積み盛り方

先ず供物の食材のあり方に中国の^{さんせい}三牲の考えの影響が窺える。祖先を祀るには三牲 (鶏、魚、豚) や果物、餅、帛 (布) を供えることが中華の礼法 (祖先に対する報恩) に叶うというわけだが、この場合には卵が鶏、天ぷらが魚、揚げ豆腐が豚とする琉球的な変容 (三牲から^{うさんみ}御三味へ) が窺える。またシンムイを^{うじゅうむい}御重盛りと呼ぶこともあることから、重箱の伝来 (日本料理・会席膳の影響) や昆布・こんにゃくなどのことも考慮されなければならない。次に黒木を挿すことから、枝葉の広がりやムラの発展や子孫繁栄の意を表わすなどの神まつりにおける沖縄的な樹木信仰の影響も当然考えられなければならない。このようにシンムイの事例一つを採ってみても、中華の礼法、日本料理 (会席膳) の影響、沖縄の民俗宗教などが問題となるものなのである。要約するのであればその三つの要素が容易に結び付き新たな文化を生み出した場こそが、那覇港を座標の中心とする地域やその周辺地域だったのである。

さて、結びに再び真珠道 (図 1) である。真珠道は首里を出て、字国場付近からは現在の国場川や漫湖に沿う形で、豊見城を経て小禄・垣花・那覇港へと道筋は伸びている。そして上間の一日橋付近や南風原津嘉山、豊見城高安辺りまでは、かつての那覇の入江 (那覇江) としての日常的な交易圏に含まれる。饒波川・長堂川・国場川の水路を頼りに、天馬船や川船での那覇町方との往来や交流には何ら不自由はしなかった。また小禄地域は南部島尻方面からの陸路による那覇への玄関口のような交通の要衝にも当り、地域は那覇港の後背地としても絶えず那覇町方と接触していた。このような陸路と水路の要衝へ首里からの道、真珠道は接続されていたと見るべきもので、その上を人や物が行き交い、制度や文物、知識や技能などが伝わって、それぞれのムラに個性ある文化を残して来た (あるいは伝えて来た) ことを歴史は物語っていたのである。

大嶺には中国の土帝君 (土地公: 農業神) が伝えられ、やがては沖縄各地へ広まった。またかつての鏡水地内には那覇と大和との往来安全を願って箕之隅に観音像が祀られ、多くの船子が参拝した。小禄・豊見城・垣花には木綿織が普及し、紺地の緋は明治以降には沖縄の女性たちの憧れの品となっていった。また袋中上人の小禄浄土や垣花浄土の教えと共に、念仏踊りも伝えられ、現在のエイサーの起源ともされている。加えて、具志や宇栄原、田原、豊見城などには梵字碑が残されてもいる。これらは外来文化が最初にもたらされるこの地域の特徴を物語る幾つかの事例にしか過ぎないかもしれないが、小禄地域やその周辺の歴史と文化を考えるための那覇江・真珠道文化圏を構想する上では極めて有効であると考えているものである。そしてその検証こそが、今後の課題となるべきものである。

付記 那覇江・真珠道文化圏 (仮説)

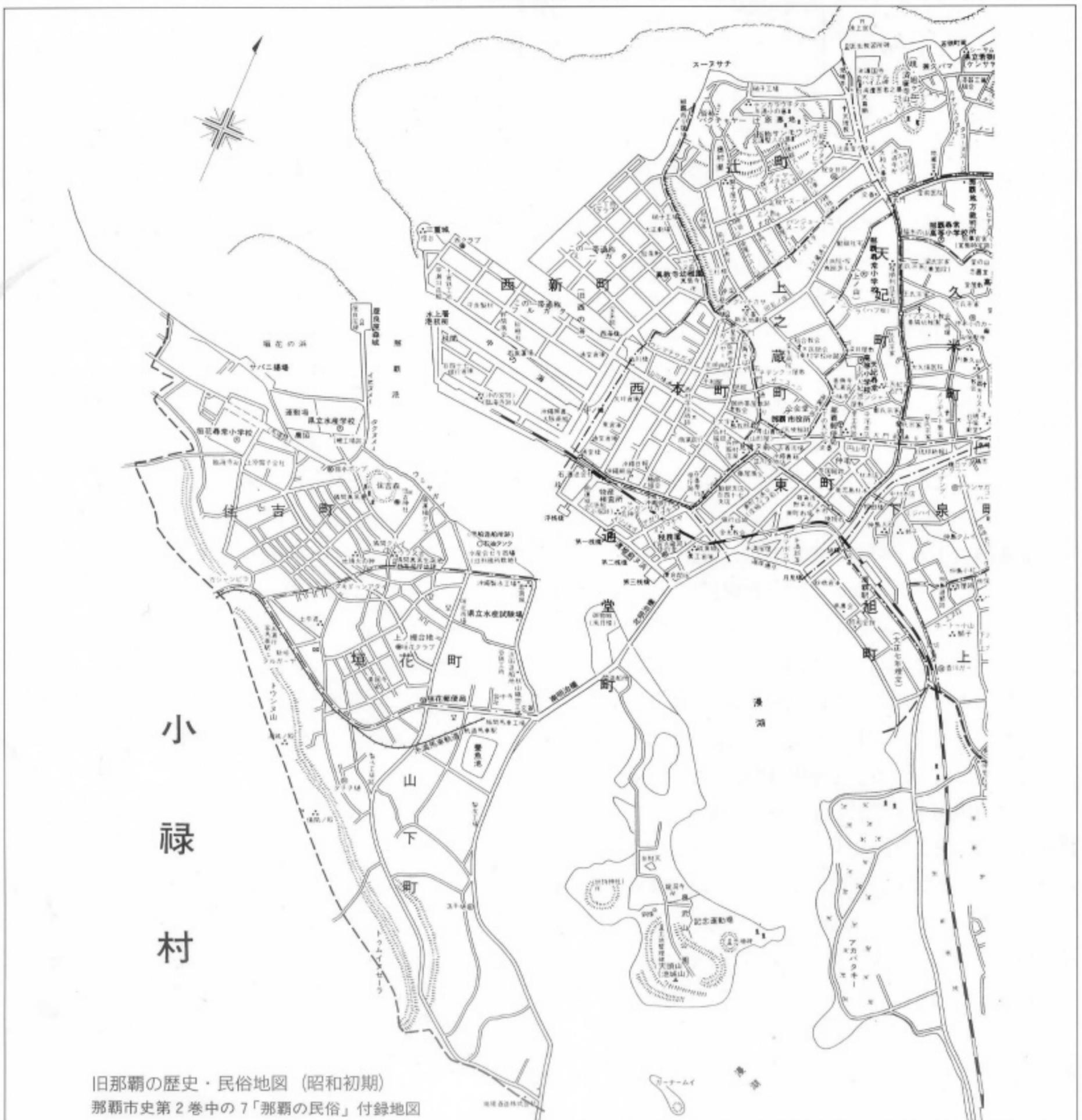
那覇江とは那覇港と那覇浮島へつながる水路網 (河川や内海) やその接続域を含めた近郊近在的な地域の水平的な広がりを想定した概念で、都市的消費文化の即時的な伝播や通時的で継続的な伝播を念頭に置いたもの。真珠道とは、直截的には首里と那覇港とを結んだ琉球王府造営の石畳道の事だが、真珠道文化圏とする事によって、その道沿いにある村々と王府との関わり、行政制度や法制度、祭祀の面でのノロ制度などに見られる被支配的な束ねの概念を表現したもの【王府支配の下で、農業生産および農産物流通、農業に関わる祭祀や芸能の流通にも寄与した】。また首里地域との関わりと云う点では王朝的な文化の伝播も想定に入れている。

小禄、豊見城、真和志、南風原辺りまでの範囲が対象になると考えている。

※ 本稿の参考文献および典拠は煩瑣を避ける為、省略したが、各字の字誌に負うところは極めて大である

垣花ま〜い -写真で見る今昔-

写真：新垣正則 資料：新垣光信 (うるくの歴史と文化を語る会会員)



旧那覇の歴史・民俗地図 (昭和初期)
那覇市史第 2 巻中の 7「那覇の民俗」付録地図



1952年頃の山下交差点、左方向明治橋方面、右側ガジャンピラ方面、中央上にガーナムイが見える。左側の鉄筋コンクリートの建物は現在軍港ゲート隣の消防署



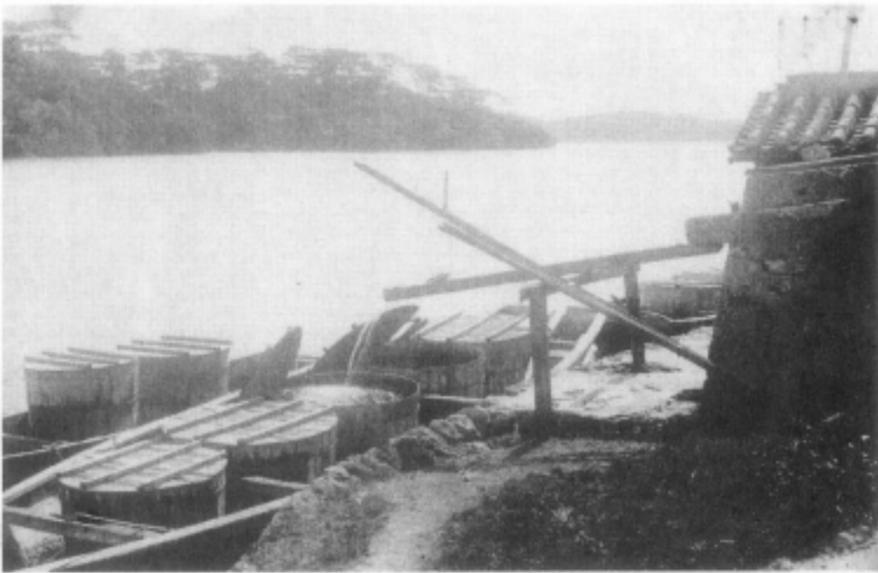
1958年頃壺川方面から望むガーナムイ、右側が奥武山、対岸に字小祿の集落が見える。



①明治36年に北・南明治橋が完成、写真は北、全長180m



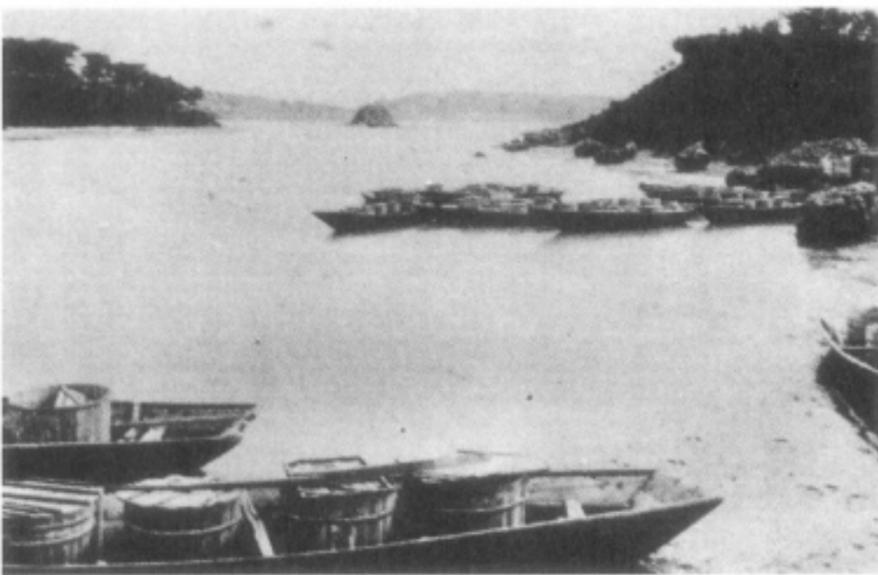
②那覇港から望む明治橋 (2013年 5 月撮影)



③落平樋川の伝馬船。対岸に奥武山が見える (昭和 7 年頃)



④落平樋川県道 7 号線より望む (2013年 5 月撮影)



⑤落平樋川で順番を待つ伝馬船、遠方にガーナームイが見える



⑥ガーナームイ中央、左側小禄ノ殿・森口公園 (2013年 5 月撮影)



⑦小禄の集落越しにガーナームイを望む。対岸壺川方面 (戦後)



⑧ガーナームイの遠望中央、右側那覇大橋 (2013年 5 月撮影)